

暗夜

一葉

青空文庫

(その一)

取まわしたる邸の廣さは幾ばく坪とか聞えて、閉ぢたるまゝの大
 門は何年ぞやの暴風雨をさながら、今にも覆へらんさま危ふく、
 松はなけれど瓦に生ふる草の名の、しのぶ昔しはそも誰れとか、
 男鹿やなくべき宮城野の秋を、いざと移したる小萩原ひとり錦を
 ほこらん頃も、觀月のむしろに雲上の誰れそれ様、つらねられけ
 る袂は夢なれや、秋風さむし飛鳥川の淵瀬こゝに變はりて、よか
 らぬ風説は人の口に殘れど、餘波いかにと訪ふ人もなく、哀れに
 淋しき主從三人は、都會ながらの山住居にも似たるべし

山崎の末路はあれと指されて衆口一齊に非はならせど、私欲ならざりける證據しるしは、家に餘財のつめる物少なく、殘す誹りの夫れだけには施しける徳も、陰かげなりけるが多かりしかば、我れぞ其露にとぬれ色みする人すらなくて、醜名ながく止まる奥庭の古池に、あとは言ふまじ恐ろしやと雨夜の雜談に枝のそひて、松川さまのお邸といへば何となく怕こわき處のやうに人思ひぬ

もとより廣き家の人氣すくなければ、いよいよ空虛がらんとして荒れ寺などの如く、掃除もさのみは行届かぬがちに、入用の無き間は雨戸を其まゝの日さへ多く、俗にくだきし河原の院も斯くやとばかり、夕がほの君ならねど、お蘭らんさまとて冊ひとかるる娘の鬼にも取られで、淋しとも思はぬか習ならはし慣あやしく無事なる朝夕が不思議な

り

晝さへあるに夜るはまして、孤燈かげ暗き一室まに壁にうつれる我が影を友にて、唯一人悄然と更け行く鐘をかぞへたらんには、鬼神をひしぐ荒ら男たりとも越し方ゆく末の思ひに迫まられて涙は襟に冷やかなるべし、時は陰曆の五月二十八日月なき頃は暮れてほどなけれども闇の色ふかく、こんもりと茂りて森の如くなる屋後の檜の大樹に音づるゝ、風の音のものすごく聞えて、其うら手なる底しれずの池に寄る浪のおとさへ手に取るばかりなるを、聞くともなく聞かぬともなく、紫檀の机に臂を持たして、深く思ひ入りたる眼は半ばねふれる如く、折々にさゞ波うつ柳眉まゆの如何なる愁ひやふくむらん、金をとかす此頃の暑さに、こちたき髪のうち

るさやと洗しけるは今朝、おのづからの緑したゝらん計なるが肩にかゝりて、こぼるゝ幾筋の雪はづかしき頬にかゝれるほど、好色たる人に評させんは惜しゝ、何とやら観音さまの面かげに似て、それよりは淋しく、それよりは美しく

忽ち玄關の方に何事ぞ起りたると覺しく、人聲俄かに聞えて平常

ならぬに、ねふれる様なりし美人はふと耳かたぶけぬ、出火か、

鬪諍か、よもや老夫婦がと微笑はもらせど、いぶかしき思ひ

に襟を正して猶聞とらんと耳をすませば、あわたゞしき足音の廊下が高く成りて、お蘭さま御書見でござりまするか、濟みませぬがお薬を少しと障子の外より言ふは老婆の聲なり

何とせしぞ佐助が病氣でも起りしか、様子によりて薬の種類もあ

れば、せかずに話して聞かせよと言へば、敷居際に兩手をつきたる老婆は慇懃いんぎんに、否いな老爺おやぢでは御座りませぬ

今宵も例の如く佐助、お庭内の見廻りをすまして御門の締りを改ために参りし、潜りの工合の悪くして平常つねさわる處のあれば、夫そを直さんとて明けつしめつするほどに、暗をてらして彼方の大路より飛くる車の、提燈かんぼんに澤瀉をまだかの紋ありしかば、氣ばやくも浪崎さまの御入來おはしたると思ひて、閉づべき小門を其ままに待参らせし、されども夫れは浪崎さまにては非ざりしならん

其車の御門前を過ぐる時、老爺も知らざりし何時の間にか人のありて、馳せすぐる車の輪に何として觸れけん、あつと叫ぶ聲に驚きし老爺の、我が額を潜りに打ちし痛さも忘れて轉ろび出しに、

憎くきは夫れと知りつゝ宙を飛ばして車は過ぎぬ

残りし男の負傷けがはさしたる事ならねど、若きに似合ぬ意氣地なしにて、へたくと弱りて起つべき勢ひもなく、半分は死にたるやうな哀れの情態さま、これを見捨る事のならぬ老爺が、お叱りを受くるかは知らねどお玄關まで荷ひ入れしに、まだ人心地のあるやなしなる覺束なさ、ともかく一ト目見ておやり下され、嘘ならぬ憐れさと語りける

(その二)

數日の飢と疲れに綿のごとく成し身を、又もや車の齒にかけられ

て、痛みと驚きとに魂いつか身を離れて、氣息の絶えける暫時は夢の様成りしに、馥郁とせし香の何處いづこともなくして、胸の中すゞしく成ると共に、物に覆はれたらん様なりし頭の初めて我れに復へりて、僅かに目を開きて身邊を見廻ぐらせば、氣の付しと見ゆるに藥今すこしといふ聲その枕に聞えて、まだ魂の極樂にや遊ぶ、いづれ人間の種ならぬ女菩薩枕邊ここにおはしましけり

さりとは意地のなき奴、疵は小指の先を少しかすりて、蜻蛉おふ小僧が小溝にはまりても此位の負傷けがはありうちなるに、氣を失なふ馬鹿もなき物ぞ、しつかりして藥でも吞めやと佐助のやかましく小言いふを、左様あらしくは言はぬ物、いづれ病後か何ぞにて、酷ひどく疲れて居るらしければ、靜かに介抱して遣るがよし

心を置くべき宿ならねば氣を落つけてゆるくと睡り給へ、幾日ありとて此處にはさしつかへも無けれど、我家へ知らせたしと思はゞ人を遣りて家内の人をも迎ふべし、不時の災難は誰れとても有るならひなれば、氣の毒などの念をさりて思ふまゝの我まゝを言ふがよし、打見し處が病氣あがりかとも見ゆるに、斯く夜に入りても家に歸らずば、有らば二夕親の心配さこそと思はるゝに、今宵は此處に泊まる事として人をば宿處に走らすべし、まのあたり目 前
 見ての憂ひよりは おもひやり想 像 にこそ苦はまされ、ことなること別 條 なきよし
 を知らせて、其さまさまに走しる想像の苦を安めたし

住處はいづれぞと問はれて、からく起かへる男の頬はいたく肉落
 て、大きやかなる眼の光りどんよりと、鼻はひくからねど鼻筋い

たく窪^{くぼ}みて、さらでも差いでたる額のいよ／＼いちじるく、生際薄くして延びたる髪は領^{あがり}をおほへり。物いはんとすれど涙のみこぼれて、色もなき唇のふる／＼と戦^{わな}くは感の胸に迫りてにや、お蘭は靜かにさし寄りていざと藥をすゝむれば、手を振りて最早氣分はたしかでムりまする

歸るべきに家なく、案じ給ふ親なければ、車に曳ころされぬとも、道に行だほれぬとも、我れ一人天命を觀ずる外、世間に哀れと見る人もあるまじ、情ある方々に嬉^こしき詞^{ことば}をそゝがるゝは、薄命の我れに中々の苦るしみを増す道理なれば、氣の付かざりし程は兎も角、今は御門外にすてさせ給へ、命あるほどは憂きを見盡して、魂^かさりての屍體^{からだ}は瘦せ犬の餌食にならば事たる身なり。恨めしか

りし車の紋は澤瀉、闇なれども見とめたりし面かげの主に恨は必ず返へせど、情ある方々に御恩報じの叶ふべき我れならず

さらば免るし給へと身を起すに足もと定まらず、よろ／＼とするを、扱もあぶなし道理わけのわからぬ奴めやつ、親がなしとても其身は誰れから貰ひしぞ、さる無造作に粗末にして濟むべきや、汝ごとき不了簡ものゝ有ればこそ、世上の親に物おもひは絶えざるなれと、我れも一人もちたる子に苦勞したりし佐助が、人事ならず氣づかはしさに叱りつけて坐らすれば、男は又もや首うなだれて俯うつぶく逆上してをかしき事を言ふらしければ、今宵一夜こゝに置きて、ゆる／＼睡らせたしと老婆もいふに、男は老夫婦ふたりにまかせてお蘭は我が居間に戻りぬ

(その三)

籬にからむ朝顔の花は一朝の榮へに一期の本懐をつくすぞかし、
 我身に定まりたる分際を知らば、爲らぬ浮世に思ふことあるまじ
 く、甲斐なき悶に腸にゆべしやは、さても祖父の世までは一郷の
 名醫といはれて、切棒の駕籠に畔ゆく村童わらべまで跪ひざまづかせしものを、
 下りゆく運は誰が導きの薄命道、不幸夭死の父につゞきて、母は
 野中の草がくれ妻とは言はれぬ身なりしに、浮世はつれなし親族みより
 なりける誰れ彼れが作略に、争そはんも甲斐なや亡き旦那様こそ
 照覽ましまして、八幡いつはりなき御胤たねなれども、言ひ張りてから

が欲とやいはれん卑賤の身くやしく、涙をつゝみて宿に下りしは
此子胎内にやどりて漸く七月、主様うせての二七日なりける、さ
るほどに狭きは女子の心なり、恨みにつもる世の中あぢきなく成
りて、死出の山踏み、今日や明日やと祈れば、さらでもの初産に
血のさわぎ烈はげしく、うみ落せし子の顔もゑしらで、哀れ二十一の
秋の暮一村しぐれ誘はれて逝きぬ、東西しらぬ昔しより父なく母
なく生立ば、胸毛に埋もれし祖父の懐ふところ中より外に世のあたゝか
さを身に知らねば、春風氷をとく小田のくろに里の童が遊びにも
洩れて、我れから木がくれのひねれ物に強情いよいよつのであれば、
憐れをかくるは祖父一人、世間の人に憎くまるゝほど、不憫や親
のなき子は添竹のなき野末の菊の曲がるもくねるも無理ならず、

不運は天にありて身から出たる罪にもあらぬを親なし子と落しめ
 る奴原が心は鬼か蛇か、よし我等が頭に宿り給ふ神もなく佛もな
 き世なるべし、世間は我等が仇敵かたきにして、我等は遂に世間と戦ふ
 べき身なり、祖父ぢいなき後は何處にゆきても人の心はつれなければ、
 夢いさゝかも他人に心をゆるさず、人我れにつらからば我れも人
 につらくなして、とても憎くまるゝほどならば生なまなか中人なまなかに媚びて
 心にもなき追縦に、破れ草鞆の踏つけらるゝ處業は爲すなとて、口
 惜し涙に明暮の無念はれまなく、我が孫かはゆきほど世の人にく
 ければ、此子これが頭こぶしに拳こぶし一つ當てたる奴は、假令たとへ村長どのが息子に
 もせよ理非はとにかく相手は我れと力味たつ無法の振舞漸くつ
 れば、もとより水呑百姓の瘦田一枚もつ身ならぬに、憎おひほき老おひほ

毫^れが根生骨、美事通して見よやと計、田地持に睨まれたるぞ最

期、祖父孫二人が命は風にまたゝく殘^{ありあけ}燈の、言はんも愚かや消

ゆるは定なり

娘が死亡^{うせて}の十三回忌より老爺は不起の病にかゝりぬ、觀念の眼か

たく閉ぢては今更の醫藥も何かはせん、哀れの孫と頑なの翁と唯

二人、傾きたる命運を茅屋^{わらや}が軒の月にながめて、人間かば魂^{たま}や消^け

ぬべき凄^{すこ}く無慘の詞を殘して我れは流石に終焉みだれず、合唱す

べき佛もなしとや嘲けるが如き笑みを唇に止めて、行衛は何方^{いづく}ぞ

地獄天堂、三寸息たえて萬事休みぬ

残りし孫ぞ即ち今日の高木直次郎、とる年は十九、積もりし憂さ

は量るも哀れや、仰げば高き鹿野山の麓をはなれ、天羽郡と聞え

し生れ故郷を振すてけるより、おのれやれ世に捨られ物の我れ一身を犠牲に、こゝ東京に醫學の修業して聞つたへたる家の風いざや、とばかり、母と祖父との恨を負ひて誰れにか談合はからん心一つを杖に、出し都會みやこに人鬼はなくとも何處の里にも用ひらるゝは才子、よしや輕薄の誹りはありとも、口振伶俐に取廻しの小器用なるを人喜ぶぞかし、孟嘗君今の世にあらばいざ知らず、癖づきし心は組糸をときたる如く、はても無くこぢれて微塵みぢん愛敬のなきに、仕業も拙なりや某博士誰れ院長の玄關先に熱心あふるゝ辨舌さはやかならず、自みづから身食客の糶賣せりしたりとて、誰れかは正氣に聞くべき何處にも狂氣あつかひ情なく、さる處にて乞食とあやまたれし時、御臺處に呼こまれて一飯の御馳走下しおかれしを、さりとは

無禮失禮奇怪至極と蹴かへす膳部に一喝して出ぬ

野猪ししに似たりし勇のみあふれて、智恵は袋の底にや沈みし、誰が目に見ても看板うつて相遠なき愚人と知らるれば、流石に憐れむ人も有りて心は低ひくくせよ身をおしむな、其身に合ひたる勞はたらき働ならば夫れ相應に世話しても取らすべしとて、湯屋の木拾ひ、蕎麥屋のかつき、權助庭男の數を盡して、一年がほどに目見への數は三十軒、三日と保たず隨徳寺はまだ宣し、内かみさま儀がじやらくらのびんたぼ胸わるやと、張仆して馳出けるもあり、且那どのと口論のはては腕だての始末むづかしく、警けいさつ察のお世話にも幾度とかや、又ぞろ此地こゝも敵の中と自ら定めぬ

木賃宿とて燈火くらき場末の旅店に帳つけといふ物して送りける

昨日今日、主人が輕侮の一言に持病むらむらとして發れば、何か
 堪へん筆へし折りて硯を投つけつ、さして行手は東西南北、臥す
 や野山の當もなき身に高言吐ちらして飛び出せば、それよりの一
 飯も如何はすべき、舌かみ切て死なん際まで人の軒ばに立つ男な
 らねば、今日も暮れぬる入相の鐘に、さても疇をしらぬ身は旅
 鳥にも劣りつべく、來るともなく行くともなく、よろめき來た
 りし松川屋敷の表門、驚破といふ間に引過し車ぞ佐助も見たりし
 澤瀉の紋なる

(その四)

此處に助けられける夜より三日がほどを夢に過ぐせば、記憶はた
しかならねど、はじめ最初の夜みたりし女菩薩枕のもとにありて介抱し
給ふと覺しく、朧氣ながら美しくしき御聲になぐさめられ、柔らか
き御手に抱かるゝ我れは宛さながら然天上界に生れたらん如く、覺めな
ば果敢なや花間の蝴蝶、我れは人かの境に睡りぬ

浮世の中の淋しき時、人の心のつらき時、我が手にすがれ我が膝
にのぼれ、共に携へて野山に遊ばゞや、悲しき涙を人には包むと
も、我れにはよしや瀧津瀬も拭ふ袂は此處にあり、我れは汝が心
の愚かなるも卑しからず、汝が心の邪なるも憎くからず、過にし
方に犯したる罪の身を苦しめて、今更の悔みに人知らぬ胸を抱か
ば、我れに語りて清しき風を心に呼ぶべし、恨めしき時くやしき

時はづかしき時はかなき時、失望の時、落膽の時、世の中すて、
山に入りたき時、人を殺して財を得たき時、高位を得たき時高官
にのぼりたき時、花を見んと思ふ時月を眺めんと思ふ時、風をま
つ時雲をのぞむ時、棹さす小舟の波の中にも、嵐にむせぶ山のか
げにも、日かげに踈き谷の底にも、我身は常に汝が身に添ひて、
水無月の日影つち裂くる時は清水となりて渴きも癒いさん、師走の
空の雪みぞれ寒き夕べの皮衣とも成ぬべし、汝は我と離るべき物
ならず、我れは汝と離るべき中ならず、醜美善惡曲直邪正、あれ
もなし、これもなし、我れに隠かくすことなく我れに包かむことなく、
心安く長閑に落付きて、我が此腕かに寄かり此膝かの上に睡るべしと、
の給ふ御聲心耳にひたびくく度に、何處の誰れ様ぞ斯くは優しの御言

葉と伏拜む手先ものに觸れて、たましひ魂我れにかへれば苦熱その身に燃ゆるが如かりし

斯くて眠りつ覺めつ覺めつ眠りつ、今日ぞ一週といふ其午ひるすぎ後より我れとおぼえて粥の湯のゆくやうに成りぬ、やかましけれども心切あふるゝ佐助翁が介抱、おそよが待遇、いづれもいづれも心付きては涙こぼるゝ嬉しの人々に、聞けば病中の有様の亂暴狼藉、あばれ次第にあばれ、狂ひ放題くるひて、今も額に残るおそよが向ふ疵は、我が投げつけし湯呑の痕と説明とかれて、微塵立腹氣みぢんもなき笑顔つねの毒に、今更の汗腋わき下を傳へば後悔の念かしらにのぼりて、平常つねの心の現あらはれける我れ恥かしく、さても何如なる事をか申たる、お前様お二人の外に聞かれし人は無きかと裏どへば、佐

助大笑ひに笑ひて、聞かせたしとても人氣のござらねば、耳引た
 つるは天井の鼠か、壁をつたふ蜥蜴いもり、我と二人にお嬢様をおきて
 は此大伽藍に犬の子のかげも無く、一年三百六十五日客の來ること
 となく客に行くことなく、無人屋敷の夫れに心配は無けれど、氣
 の付かれなば淋しさに堪へがたく、今までの夢なりし代りに今宵
 よりは瞼ふつに合はず、寢られぬ枕に軒の松風、さりとは馴れぬ
 身に氣の毒やとあれば、そのお嬢様と聞まするは何時いつも枕邊ここに御
いで出たるお人か、いかにも其通りと言はれて、さらば夢にも非ざり
 けり

現か、優しき御聲に朝夕を慰さめ給ひしは、夢か、御膝に抱き給
 ひしは、正氣づきゆく日數にそへて、目まのあたり前 お蘭さまと物いふ

につけて、分らぬ思ひは同じ處を行めぐり行めぐり、夢に見たりし女菩薩をお蘭さまと爲すれば、今見るお蘭さまは御人かはりて、我れに無つれなし情となけれど一重隔ての中垣や、きつとして馴れがたき素振は何として御手にすがらるべき、何として御膝にのぼらるべき、悲しき涙を拭ぬぐへと仰せられし、お袖の端はしの端はしの端はしにも、我が手のもしも觸れたらば恥かしく恐ろしく我身はふるへて我が息はとまりぬべく、總じて夢中に見まみへし女ひとは嬉しく床しくなつかしく、親しさは我れに覚えなけれど母のやうにも有りけるを、現在のお蘭さまは懐かしく床しきほかに恐ろしく怕きやうにて、身も心も一ひとつ躰になど、懸けても仰せられんことか、見たりしには異ことなる島田鬻に、美相は斯くぞ覚えし夢中の面影をとどめて、御聲も

斯くぞ有し朝夕の慰問うれしけれど、思へば此處も他人の宿なり、心はゆるすまじき他人の宿なり、いざさらば行かん此優しげなるお蘭様が許もとをも辭して

(その五)

さらば行かんと思ひたちしより直次郎、しばしも待たぬ心は弦つるをはなれし矢の様に一直線すぢにはしりて此まゝの御暇ごひを佐助に通じてお蘭さまにと申上れば、てもさてもと驚かれて、鏡を見たまへ未だ其顔色いろにて何處へ行かんとぞ、強情は平時つねのこと病ひに勝てぬは人の身なるに、其やうな氣みじかは言はで心靜かに養生を

せであらんやは、最初はじめよりいひしやうに此家こゝには少しも心をおか
ず遠慮もいらすず斟酌も無用にして、見かへす様な丈夫の人になり
てたまはらば嬉しかるべし。袖すりあふも他生の縁と聞くを、假
初ながら十日ごしも見馴れては他處よその人とおもはれぬに、歸る
に家なしとかいひし一言のあやしきをおもへば、いづれ普通なみなら
ぬ悲しき境界さかいをさまよふにこそ、我れも見給ふ通りの有様にあれ
ゆく邸の末はいかならん、果敢なき身にもよそへられていよく
思はるゝは浮世の浪にもまれぬきてたゞよひつかれし人の上なり。
何も女の力たらで談合かたごふに甲斐なしとも、同じこゝろは榮花にあき
し世の人よりも持つ物ぞや、我れに遠慮あらば佐助もありそよも
あり、あの年浪の寄るほどには稽古もつみて世渡りの商法みちも知ら

ぬではなく、それこそ相談の相手にも成るべし。家は化物屋敷のやうなれど人鬼の住家でもなければ、さのみは物恐ぢをし給ふなと、少し笑ひてお蘭さまの仰せらるゝは我が意氣地なくくだらなき奴を見ぬき給ひてなぶらるゝにや、誠に我れは此處をはなれてはいづくへ行かん目的あてもなく、道にて病まば誰れかは助けん其まゝの行仆れと、我身の弱きに心さへ折れて、恥かしけれど直次郎、はじめの勢ひには似ず強てもとは言はざりけり。

老夫婦ふたりは猶もおらん様が詞の幾倍を加へて、今少し身躰からだのたしかに成るまでは我等が願ひても此處に止めたしと思ひしを、嬢様よりのお言葉なれば今は天下はれての御食いそうちう客きやくぞや、肩身を廣くおもふ事をも爲し此處の用をも助けて、大きに働くがよかるべし、

若き者の愚圖々々と日を送るは何よりの毒なればとて、身にあふほどの用事を彼れ是れとあてがひて、家内の物の様にあつかわるれば、それに引れて氣の毒もうすく、一日二日三日四日、さらばお詞にあまへても言はねど、やう／＼に根の生へて我れも分らぬ日を何とはなしに送りぬ

さしも廣かる邸内を手入れのとゞかねば木はいや茂りに茂りて、折しもあれ夏草ところ得がほにひろければ、忘れ草しのぶ草それらは論なし、刈るも物うき雑草のしげみをたどりて裏手にめぐれば幾抱への松か枝大蛇おろちの中のぞめる如くうねりて、下枝はぬるゝ古池のふかさいくばくぞ、むかしは東屋のたてりし處とて、小高き處の今も名残は見ゆめれど、まやのあまりも淺ましく荒れて、

秋風ふかねど入日かげろふ夕ぐれなどは、獨りたつまじき怪しの心さへ呼おこすべく、見わたす限り物すさまじき宿に、さらでも沈みがちの直次郎、明ぬれど暮ぬれど淋しきおもひは満身をおそひて、いよく浮世に遠ざかるやうなり

月にも闇にもをかしきは夏の夜といへど斯る宿の夕月夜、五條わたりの軒のつまならば夕がほの猶や花々しかるべき、お蘭さまの居間といへるは廊下いく曲りはるかにはなれて、獨りや物おもふ呼べど答へも松風のおと物さわがしき奥の奥の奥坐敷なり、直次は老夫婦ふたりと共に玄關ちかき處にあれば一家の内ながらおのづからの隔てに、病中とは異なりて打とけて物いふ事も少なく、佐助おそよとても嬢様をば神さまのやうにいつきまつりて、大事に大事

に大事に、我が命はよしや芥のすてもせん此御爲ならばと忠義は
することながら、唯だ恐れてかしこみて、此處にさかりの名花一
木、散らさじ折らさじと注繩しめ引はへて垣の外より守るが如く、馴
れての睦みのあらざれば直次もいつしか引いれられて、我れは食
客の上下相通の身ながら、さなからお主様のやうにぞ覺えける、
されば月の頃の夕納涼とて團扇かた手に浮世ものがたり聲たか／
＼と、晝のあつさを若竹の葉風に拂ひて蚊遣の烟り空になびか
する軽々しきすさびもあらねば、何として分るべきお蘭さまの人
となりも此家の素性も、唯雲たぐをつかむやうの想像に、虚實はしら
ず佐助おそよが物語を加へて、僅かに松川何某と言ひし財産家の
浮世にはづれ易き投機にかゝりて、花と望みし峯の白雲あとなく

消れば、残るはお蘭さまの御身一つと、痛はしや脊負ふにあまる
もの負債もあり、あはれ此處なる邸も他人ひとの所有ものと、唯これだけをさと曉
 り得ぬ

(その六)

庭草におく露玉をつらねて吹風こゝちよき或る朝ぼらけのこと、
 おらん様いつより早くお起きなされて、今日は父様が御命日なれ
 ば、お花は我れが剪りて奉らんとて、花鋏み手にして庭へ下りら
 るゝに、撫子ならば裏の方が美しくして、直次もつゞひて跡を追
 ひぬ。

いづぞは問はんと思ひし此處の様子を、お蘭様が口づから聞くよしもやと直次郎、例に似ず口がるに物いへばお蘭様も機嫌よげにて、早百合なでしこあれこれの花は剪りて後も、我が庭ながら物珍らしげに見あるき給ふ嬉しさ、直次は何氣なき躰にて今日のお志しは御父上様とか、御前様は幾年いくつにて別れ給ひしぞと問へば、
汝そなたも早くよりの一人者とや我れによく似しことかなとほゝゑまる。此坂を下りてあしこへ行きて暫時やすまん、つかれては話しも厭やなればと仰せあるに、さらば歸りたまふか、厭々、今しばし遊ばんとて、苔なめらかなる小道を下らるゝに、おあぶなしと言へば、氣のどくなれど其肩をかし給へとてつと寄りて此處を下りぬ。下りて出るは例の池の岸なり、木の切株の平らなるに御座を拂ひ

て此處にお休みなされよと言へば、嬉しきことよの今朝は弟の介抱をうくるやうなり、其方も此處へ休まばよきにと半分を譲らるれば、何として勿躰なきことゝ直次は別なる枯草の中へうづくまりぬ。

其方も早くに二親とも世をさりしとか、我れも母なりし人の顔はしらで、育ちしは父上の手一つなれば、戀しきなつかしきは又一倍におぼゆるぞかし、平常つねはともあれ由縁ゆかりある日はこと更におもひ出されて、まぎらさんとても氣のまぎれぬは今日なり。其方にも其おぼえはあるべしとあるに、誠に其通りとて直次も涙ぐまれぬ。さてもお父様は幾年の前にか失せ給ひし、お前さまの親御様なれば御年もまだお若かりしならんと問へば、いや若しといふほ

どにはあらず、別れしは八年の前おもへば夢のやうな別れ成しとあるに、さらば御病氣は俄の病にてやありしと、たゞみかけて問へば、何の病氣かは、我が父はこれこの池に身を沈め給ひしなり。直次が驚愕おどろきに青ざめし面おもてを斜に見下して、お蘭様は冷やかなる眼中まなこに笑みをうかべて、水の底にも都のありと詠みて帝みかどを誘ひし尼君が心は知らず、我父は此世の憂きにあきて、何處にもせよ靜かに眠る處をと求め給ひしなり、浪は表面おもてにさはぐと見ゆれど思へば此底は靜なるべし、暗くやあらん明くやあらん、世の憂き時のかくれ家は山邊もあさし海邊もせんなし、唯この池の底のみは住よかるべしとて靜かに池おもての面を見やられぬ。

吹風松の梢にたかく音づるれば、やがてさゞ波池の面におこりて

草のそよぎも後の見らるゝに、お蘭さまは猶たゝんともし給はず、
直次は何故そのやうにかしこまりてのみ居るのでや、我れ斗りな
らで汝も何ぞ話して聞かせよと仰せらるゝに、いよゝゝ詞のふさ
そなた
がりてさしうつむけば、困りし人よ女のやうな男と笑はれて、今
更きえぬ心の恐れも顔色いろに出て笑はるるにや、我が意氣地なさに
比べてお蘭さまはどれほど強き心を持てば彼の様に平氣に落つき
て、すらゝと物語をつゞけらるゝならん、我れは聞くのみにも
膽の冷るやうなるをと、物は言はで御顔を打守れば、思ひなしに
や流石に色は青白く見ゆ。

さりながら此はなしは他人に聞かすまじきぞや、物いひさがなき
は世のならひながら、親のことなれば口惜しきぞかし、汝とても

これを知りては此處は厭とおもふやうに成るべきか、さらば話す
のでは無かりしにと、少し景色のかはりて言へば、何として何と
して、其やうなこと思ふて成りましようや、又口外などはもとよ
りの事、夢さら御心配なされますなといへば、誠に我が弟同様に
おもふ心易だてより、底の見えるやうなこと聞かせし恥かしさ、
何も聞ながしにし給へ、さらば行かんと立あがるに、花は我が持
ちて參らん、いや夫れよりは手を助けて給はれとて、例の脇道に
かゝりし時、白く美しくしき手を直次が肩にかけつゝ、小作りに見
ゆれど流石に男は丈の高きものかな、そなた汝は幾歳とや十九か二十か、いくつ
我れに比らべてよほどの弟とおぼゆるに、我れはまあ幾歳ほどに
見ゆるぞや、されば一二の※君か、何として何として、すがれと

言ふ三十はやがてほどなき廿五といふ、それは誠に何たる御若さといへば、褒めるのかやそしるのかや、とて御顔あかみぬ。

(その七)

女子は温順にやさしくは事たりぬべし、生中もちたる一節の、よきに随ひて好きよきは格別、浮世の浪風さかしまに當りて、道のちまたの二筋にいざや何方いづこと決心の當時、不運の一あほりに炎あらぬ方へと燃えあがりては、お釋伽さま孔子様兩の手をとらへて御異見あそばさるゝ共、無用のお談義お置なされ、聞かぬ聞かぬと振りりのくる顔の眼に涙はたゝゆるとも、見せじ、こぼさじ、これを

浮世の剛情我慢と言ふぞかし、天のなせる麗質よきは顔のみか、
姿とゝのひて育ちも美事に、斯くながら人の妻とも呼ばれたらば、
打つに點なき潔白無垢の身なりけるを、はかなきはお蘭が身の上
なり、天地に一人の父をうしなひて、しかも病ひの床に看護の幾
日、これも天壽と醫藥の後ならばさても有るべし、世上に山師の
そしりを殘して、あるべき事か我れと我が手に水底の泡と消えた
る、原因おこりの罪はとかぞふれば流石に天道是れ無差別とは言ひがた
けれど、口に正義の髭つき立派なる方様のうちに、恐ろしや實まことの
罪はありける物を、手先に使はれける父の身はあはれ露拂ひなる
先供なりけり、毒味の膳にあてられて一人犠牲にのぼりたればこ
そ、殘る人々の枕たかく春の夜の夢花をも見るなれ、さては恩あ

る忘れがたみに切めては露の情もあるべきを、荒れゆく門に馬車
あとたえて、行かば恐ろし世上の口と、きたなき物は人心ならず
や、巫峽ふかうの水みづの木みぎの葉舟かゝる流れに乗りたるお蘭が、悲しさ怕
さ口惜しさの乙女心に染こみて、よしさらば我れも父の子やりて
のくべし、悪ならば悪にてもよし、善とはもとより言はれまじき
素性の表面うわべを温和につゝんでいざ一と働き、仆れてやまば夫れま
でよ、父は黄泉よみぢに小手招ぎして九品蓮臺の上品ならずとも、よろ
しき住家は彼の世にもあるべし、さらば夢路に遊ぼんの決心、こ
れさらしく好きすに狂ひしうかれ心かは、時ときにかられて涙は胸に片
頬笑みしつ、見あぐる軒のきば日毎にあるれど、しのぶの露をあはれ
風流みやびとうそぶく身は、人しらぬあはれ此中にあり。

爲すまじきは戀とや、色ある中に忍ぶ文字ずり、卒みちのくぎ陸奥にあ
りといふ關の人目にと絶えを詫るは優しかるべし、懸けつかけら
れつ釣繩のくるしきは欲よりの間柄なり、一人は誠の心より慕ふ
ともよりあはねば是れも片糸の思ひやすらん、其比番町に波崎漂
とて衆議院に美男の聞えある年少議員どのありき、遠からぬ縣よ
り撰出の當時、やかましかりし沙汰も世のならひとて疵にはなら
ねど、秘密は松川との間にかくれて今日の財産も半なかばは何より出し
やら、世にある頃は水魚の交り知らぬ人なく、よき智得つと洩ら
せし一ト言を耳に残せる人もあれど、浮雲おほふて乍ち昏し扶桑
の影、なしと言はゞ夫れまでなる外國あるきに年月を経て、歸り
しは其人すでに亡せけるの後、今日の羽風に昔しの塵を拂ひて、

又ぞろ釣り出すや其筋のゆかり、官臭とやら女子の知らぬ香のす
 る黨には鮒馬の君とて用ひも輕からず、演説上手にて人をも感動
 さするよし、夫れもしかなり口車よく廻はらでやは、萬一もしやに引か
 れて二十五の秋まで、哀れお蘭が獨寢の枕に結ばぬ夢の行衛はこ
 れなり、誰が爲まもる操の色ぞ松の常盤もかくては甲斐なき捨ら
 れ物に、一身つく／＼と觀じては、浮世いや／＼墨染の袖に、
 さが野は遠し此處こゝながらの世すて人ともならんは常なれど、憎く
 き男心におめ／＼と秋の色ひとり見て、生きとりの經佛に爲せうこと事
 なしのあきらめ、夫れも嫌々、とても狂はゞ一世を闇にして、首
 尾よくは千載の後まで花紅葉ゆかしの女ひとに成りおほせ、出來ずは
 一時の榮花に末は野となれ山路の露と消ゆるもよし、我ながら女

夜叉の本性さても恐ろしけれど、かく成行くはこれまでの人なり、悔まじ恨まじ浮世は夢と、これや戀をしをりに淺ましの觀念、おそろしきは涙の後の女子心なり。

(その八)

此夏もくれて秋は萩の葉に風そよぐ比も過ぎぬ、松川屋敷の月日はいかに流るゝか、お蘭さま作助夫婦、直次の上にも變りたることなく、唯年來熱心なりし醫學の修業をおもひ絶えたるのみぞ此男の變動なりける。

どうでも遣りまする、骨が舍利になるともやりまする、精神一到

何事か出来ぬといふ筈はなく、我れも男なれば言ひたる事を後へは引き難し、これまでも散々と村の奴原にも侮どられ、此都こゝに出ても輕蔑されて出来ぬ物に言ひおとされましたれば猶さらの事、美事通して見せねば骨も筋もなき男でござります、我れは其やうな骨なしに見えまするかとて、いつも此話しの始まりし時は青筋出して疊たゝみをたゞくに、はて身知らずの男、醫者になるは芋大根つくりたてるとは豎たてが違ふぞとて、作助は眞向より強こわもて面の異見に、とても出来ぬ事はよして仕舞へと言ひける、お蘭さまはつく／＼と聞きて、可愛さうに叱からずとももの事なり、夫れほど思ひ込ひたる事なれば出来まじとは言はれねど、荻ふの友ともずり殖ふえて瘦せるは世のならひなれば、随分と人數も多し、年毎にむづかしくは成

る、しかも學費の出どころが無くは一段と難義ではなきか、それが精神一到と其方はいふか知らねど、其方の寶の潔白沙汰は今の世の石瓦、此やうの事は口にするも嫌やなれど、丸うならねば思ふ事は遂げられまじ、其會得がつきたらば隨分おもう事は貫くが宜けれど、どうやら其邊がむづかしくは無きかと仰せられける、國を出しより此方、心は一途にはしりて前後をかへり見ず、どうでも貫ぬくと言ひし舌の根我れと引きたくはあらねど、打たれて擲かれて輕蔑おどされて、はては道ゆく車の輪にかけられて、今一步の違ひにては一生の不具にもなるべき負傷の揚句、あはれか愛やと救ひあげられし大恩の主様とても浮世はおなじ秋風に、門檣あれて美玉ちりにかくるゝ旦あけくれ暮のたゝずまひ悲しく、天道はどう

でも善人に與くみしたまはぬか、我が祖父、我が母、我が代までも、
 飛虫ひとつむぎとは殺さじ、里の小犬が飢渴きかつの哀れは我が一飯を
 分けてもの心、さりとは世上に敵をもうけて憎まれ者の居處なし
 に成らんとは知らざりし、今さら世上に媚をうりて初一念の貫ぬ
 かるゝとも、夫までの道中いやなりいやなり、とても辛棒なりが
 たきは泥草履つかんで追従の犬つくばひ、それで成りあがりて醫
 は仁術と勿躰ぶる事穢なし、今は此業これもやめにせん、やめになす
 べし、思ひ絶えて仕舞ふべし、我れは浮世の能なし猿さるにはなると
 も、きたなき男には得こそ成るまじ、夫れよと斷念の曉きよく、
 再ふたゝび度口にも出でず成りぬ。

さして行く處はなし、世間は仇なり、望みの空に歸してより此一

身を如何になすべき、詮方なき身の捨て處いづこと尋ぬれば、籬はあれて庭は野らなる秋草のしげみに嵐をいたむ女郎花にも似たる、おらん様が上いとしと思ひぬ、もとより我れは愚人なり、おらん様は女子なれども計り難き意志の、我れ弱虫のたぐひには有るまじきが、強しといふとも頼のむに人なき孤獨の御身に大厦の一木何として支へん、佐助おそよとても一身この君にさゝげ物の忠ならんが、我が目より見ればまだな事、かよわき御身の女子様を主にもちて、吹かば散るべき花前のあらしに掩ふたもとの狭さ狭さ、彼の人々はいづれ重代の縁もあるべし、我れはきのふけふの恩なれども、情の露の甘露にぬれては、いづれに年の長短を問ふべき、口廣けれども我れはお蘭さまに命と申す、此一言を金打

にして、心にうき世のさま／＼を思ひ断ちたれば、生死はころのまゝと、優しき弟になりぬ。

人の心はをかしき物なり、直次がお蘭さまを思ふほどに、佐助夫婦が直次に對する憐れみは薄くなりぬ、見ず知らずの最初いだき入れて介抱の心切は、つくろひ無き誠實まことなれば今とて更に衰るよしはなけれど、一にもおらん様二にもおらん様と、我がものゝやうに差出たる振舞さりとは物しらずの奴かな、御産湯の昔しより抱き參らせたる老爺われさへ、心におもふ事の半分は残して御意にしたがふは浮世の禮なるを、宿なし男の行仆れを救はれし恩は知らず、我がお嬢さまが弟がほする憎くさ、あのような物しらずは眞向から浴せつけずは何事も分るまじとて、つけくくと憎くまれ口

はゞかりなく、ともすれは此間に年甲斐もなき争ひの火の手もえあがりて、いづれに團扇のあげがたきお蘭が一人氣をもむ事もありし。

(その九)

秋は夕ぐれ夕日花やかにさして、ねぐらにいそぐ鳥の聲さびしき比、めづらしき黒鴨の車夫に状箱もたせて、波崎さまよりの御使ひといふが來たりぬ、折しもお蘭さま籬の菊に日映りのをかしきを御覽じけるほど成りしが、おそよが取次ぎて珍らしきお便り^{たよ}と差し出すに、おかしや白妙の袖にはあらでと受とりて座敷へ歸ら

れける、文は長くく一丈もあるべし、久しき途絶えをうらめし
とも仰せられぬは愁らからずや、俗用しげく心は君が宿にかよへ
ど、うき世はあし分小舟ぞかし、今日は暇を得て染井の閑居に一
人かき籠りし、理由わけは自から知り給へ、人目の煩ひなく思ふ事を
も聞えたく、我れより其邸そこを訪はんは見る目かぐ鼻うるさし、此
車にて今よりと能書の薄ずみ其昔かみならば魂も消えぬべし、これ見
よおそよ、波崎さまは相變らずお利口なりとて、格別は喜こびも
せぬお蘭が顔を不審氣に守りて、お前さまは其やうに落つきてお
出なされど邂逅たまさかの御暇に先方さまは飛たつやうなるは知れたこ
と、少しも早くお支度をなされませ、お車もまちて居りまする物
をと急ばいがするに、あれ老媪は我れに行けと言ふか、さりとは正直

ものと笑ひて返事を書く。

文の便りの度々につられて萬一もしやと思ひしは昔、今日のお蘭は其やうな優しきお嬢様氣をすてたれば、古手の嬉しがらせに仰せかしこを惶みて御別荘に御機嫌をうかゞふまでの耻はさらさじ、つれなしとてひたすら一向のかき絶えは世にあるならひと諦らめもある物を、憎くき男の地位にはほこりて何時いつまで我れを弄ばんとや、父は山師の汚名をきたれど未だ野幫間の名は取らざりし、戀に人目を忍しのぶとは表面、やみ夜もある物を千里のかち跣足はだしに誠意まことは其時こそ見ゆれ、此家こゝよりは遠からぬ染井の別荘に月の幾日を暮すとは、新聞をまたでも知るべき事なり、殊更の廻り道して我が門を他處よそに、やみがたき時は車を飛ばせて女子一人に逢はじの掛念、お笑止や

我れゆゑ天地を狭しと思すか、あまりの窮屈にいざ廣々とならん
には我れを欺たらして君様いとしと言はせ、何も時世とあきらめ給へ、
正しき妻とは言ひ難けれど心は後の世かけてなど、我れを何處どこ
までも日蔭ものゝ人知らぬ身と爲して仕舞はじ、前後に心ざはりな
くて胸安からんの所爲しわざとは見え透きたり、流石に御心には懸りて
いつぞは仇する女とおぼしめしたるか、お道理の御懸念たゞに有
るべき我れかは、裏屋の夫婦が倦かれしとは事かはれば、御身分
がら世の攻かうげき撃に居場處のなき、其やうの恥はお互たがひの事みせ申ま
じ、おのづからの恨みはゆるくと、人こそ知らね心の底には
冷やかに笑ひぬ。

返事はたゞ。折ふしの風邪に取りみだしたる姿はづかしく、中々の

御目通りに絶かね參らする事のつらければ、免し給へ、又こそとて、何もうはべは美はしくして使ひを歸しぬ。

波崎が車は此門を過ぐる事あり、直次が引かれし其夜の車も提かんば燈んの紋は澤瀉なりしに、今日の車夫も被布はツピに澤瀉の縫紋ありけり、あれとこれとは同一か別物か、直次は此使ひの來たりし時より例になき事なれば不審きおもひに心をとゞめて、終始眼をそゞぎけるが、歸る後姿を見送りし途端、不圖おもだかの縫紋われ知らず目に映りぬ。

あれは何處よりの使ひと佐助に問へば、さても宜く根堀り葉堀り聞たがる男ではなきか、人の家なれば使ひの來る事もありと無すげな

情こたへに、左様いはれては返すに詞も無けれど、どこからの使ひだ位は聞かせて呉れてもよき筈、喧嘩かひのとげくしき言葉ならでもと下手したでに出れば、はて貴様などの聞いて益はなき事、嬢様への文なれば理由わけは嬢様ならでは知りがたし、波崎どのとて新聞にも見ゆる議員どのよりの使ひといふに、夫れは御親類でもありや、此處へお出はなきやうなるが、我が參らざりし以前はお出に成し時もありしかと問ふに、夫々それがくどし、聞て何にすると笑はれて、何にもせねど被布の紋が彼の夜あの紋に同じなれば、何か心にかゝりて聞きたき心持とかたるに、さらば彼の車夫を捕らへて小指の一本も斬る心なりしか、恐ろしき執念の奴、前世は蛇でも有しやら、しかし其夜の恨みを忘れぬとは感心にて頼

母しゝ、恩をば疾くの昔しにわすれたる様なれば、よもや恨みの性根もあるまじと思ひしに、流石なり感心の男と折ふし何の瘡に障りしやら、後におもはゝ耻かしかるべき事を、舌の動くまゝにいひけり、いつもならば泡を飛ばして口論もすべき直次郎が無言に終りし屈托の程は其夜お蘭さまがお膝もとに、泣きの涙の白状いつはりなく、立聞かば共に布子の袖やしぼらん、此男の影法師うすく成りけるをば夢にも知らざりけり。

(その十)

あはれ三十一文字に風雅の化粧はつくととも、いつうせにけん幼

な心の、誠意は愚まことに似しものなりけり、其夜ふけたる燈火のかけにお蘭様を驚かして、涙にぬれし眼のうち唯事ならず、疊に兩手をきつと畏まりし直次の躰、これは何事とおらん様心もとながりにて、遠慮なき我れに斟酌は無用ぞ、おもふ事は有りのまゝにつげ給へと優しき問ひに保ちかねてはらはらと膝に玉を散らしけるが、思ひ切りて、我れにお暇を下さりませと一言、あとも先もなければ何の事とも思はれず、又物争ひの餘波なごりでは無きか、いつも言ふ通り年寄りの一徹に遠慮なき小言などを、心に懸けては一日の辛棒もなるまじく、彼男あれとても悪る氣は微塵も無き人なれば、其方の爲よかれとての言葉ならんを、苦にはすまい物、まあ何事の起りにて其やうに腹は立しと例の通り慰めらるゝに、否いな、否、否、

何も言はれましたる事もなければ、喧嘩はもとよりのこと、唯我が身に愛想が盡きましたれば、最早この世に居ることが嫌やに成りました、とて疊にひれ伏して泣きけり。

直次、其方は死なうと思ふや。誠か誠か、と膝を直して問ひ給ふに、嘘には死なれ申まじ、いつぞや奥庭に遊びし時、お池に親旦那が御最期を聞かせ給ひて、此底のみは浮世の外の静かさならんと仰せられし、あれをば今に忘れませぬ、搔きまわさるゝやうの胸の中は明けても暮れても、くれても明けても、寸の間のたゆみなしに静かなる時もなく、生れ落しより以來不幸不運の身なれば、一生を不運の内に終りたらば我が本分は盡きますするやら、お世話に成りしは今で幾月、嘘ではござりませぬお前様は我が爲の大恩

人、お袖のかげに隠くれてより面白しと思ふ事もかしと思ふ事も有りましたなれど、これが世に出で初めの終り、我れは明らかに悟つた事のあれば、最はや此嫌やな世には止まりませぬ、さりながら、未練のやうなれど、情深きお前様に無言で此世をさりまする事の愁らく、お禮は澤山たんと申度なれど、口が廻らねば是れも口惜しくござります、お前様はいつくまでも無事に御出世をなされませ、我れは此世には愚人に生れましたれば御爲にとおもふ事も叶はねど、魂はかならず御上を守りまするとて、涙に咽んで語り出る言の葉かなし。

我れは何故に君の慕はしきかを知らず、何故に君の戀しきかを知らねど、一日は一日より多く、一時は一時より増りて、我が心は

君が胸のあたりへ引つけらるゝやうにて、明くれ御姿を見御聲をきゝ、それに満足せば事なかるべけれど、唯々心は火の燃ゆるやうにて、我れながら分らぬ思ひに責めらるる果々はてく、靜かに顧みれば勿躰なや耻かしき思ひの何處どこやらに潜みて、夫故の苦とさとりたる今、此身を八裂にして木の空にもかけたきは、今日の夕ぐれの御使ひを君が御縁の方よりと知りてなり、申まじき事なれど我れは誠に妬しと思ひぬ、口惜しき事に見てけり、しかも見ねば宜かりし車夫の被布に、憎くしと染こみたる澤瀉の紋ありしかば、我れは殆ど神經病者の様なれど、あの夜の車上にちらと見とめし薄髭の有りける男を、その、その、波崎とかいへる奴、國會議員なりとか聞けば定めし世には尊ばるゝ人ならんが、其奴そやつのやうに

思はれて、これは妄念と幾度おもへども腦をさらねば其甲斐もなし、大恩ある君が戀人を恨みしと思ふ我れは即ち君が仇に成りしなり、斯くて此思ひの増りゆかばいかにせん、恐ろしと思ひしより我身は誠にすてたく成りぬ、我が身の死するは君に害を加へじとてなり、よしや我が想像のあやまりにて、今日の文には謂くあらずとも、すでに我が心の腐りはしるく、清からぬ思ひの下に忍べる上は、我れは最早大罪を犯せる身、表面はいかに粧ひて人目をつゝむとも、明くれ君につきまとふ心の、思へば耻かし我れは餓鬼道のくるしみに、美妙の御聲も身を焼く炎と成ぬべし、さては人心の頼みなさ、我れながら今日までの經歷をおもふにも時に隨がひて移りゆく後は、我れにもあらぬ我れに成りて、いかに恐

ろしき所爲をなすべきか、今うする身の御恩は萬分が一を送らねど、切めては害がいを加へ參らせじとのすさび、憎くき奴とは思し給ふとも、死うせたる後は吊らはせ給へとて、真心よりの涙に詞はふるへて、疊たみにつきたる手をあげも得せず、恐れいりたる躰、哀れとはこれをや。

(その十一)

戀をうきたる物とは誰れか言ひし、戀に誠なしとは誰れか言ひし、きのふまでの述懐我れながら恥かし、直次は我れを左ほどに思ひしか、我れは其方を思ふ事の夫それほどには非ざりしぞかし、我れは

其方を憐れとは思ひつれど命をかけても可愛しとは思はざりし、今日の今こそ其方は誠に可愛き人に成りぬ、誠ぞや、今日の今までお蘭が口づから戀しと言ひし人も無ければ、心に染みて一生の戀はせざりしなり、浮世を知らざりし乙女の昔し、誘はれしは春風か才智、容貌、それ等の外形うわべに心を亂して、今日の晝間ひるまの文のぬし、今こそ見る目も厭はしけれど、波崎といふ人にも逢ひき、斯くいはず我れを不貞とおもはくも愁らけれど、守らぬは操ならで、班女が閨の扇の色に、我れ秋風のたゞれし身なり、捨られける人に恨みは愚痴なれど、愁らきうき世に我れは弄ばれて、恐ろしとおぼすな、いつしか心に魔神の入りかはりてや、其やさしき人の前には肩身も狭き我れは悪人なるべし、夫れをも更に厭ひ給

ふまじきか、恐ろしとはおぼさぬか、さらば今日より蘭が心の良人になりてたまはれ、蘭をば君が妻と呼び給へ。

さりながら此世の縁は無き物と諦らめ給へ、我れも諦めぬべし、たま／＼嬉しき君が心を知りながら、これは我が口より言ひ出がたき事、心ぐるしさの限りなれど、浮世に不運の寄合ひと思せかし、我れを誠に可愛しとならば、其命を今此場にて賜はるまじきや、不仁の詞、不慈の心、よの常の中にもさる事は言はれまじきに、まして勿躰なき心の底を知り※きける今、此やうの情なき願ひに血を吐くおもひの我が心中を汲み給へ、今日の文のぬしは我が昔しの戀人、今よりは仇に成りて我が心のほだしは彼れのみ、斷たずば止むまじき執着を、これをも戀といふかや、我れは知ら

ねど憎くきは彼の人なり、いかにもしての恨みは日夜に絶えねど、我が手を下して率ぎとあらんは、察し給へ、まだ後に入用のある身の上つらく、欲とはおぼすな父の遺志のつぎたさになり、今二十五年の我が命に替りて、御身を捨て物に暗夜やみよの足場よき處をもとめて、いかやうにも爲して給はらずや、此やうの恐ろしき女子に我れが何時より成りけるやら、死なるゝ身ならば我れも死にたけれどもと常に涙は見せし事なきお蘭さまの、襦袢の袖にぬぐふ露あり。

君が恨みのおもだかは正しく其人と我れは思ふぞかし、染井の宿に飛ばす車の、折から悪るき我が門前にての出来ごとなれば、知られて成るまじの千里一ト飛と、負傷けがは正しく其人の所爲なれど、

原因は我れを恐るゝよりの事、おもへば何も我が罪なりし、君をおこりば我が手に救ひしにはあらで、言はゞ死地に導くやうの成行、何もこれまでの契りと御命を賜はれや、さりながら斯くいふ君の運つよきは、逃るゝ丈のがれて美事その場をさへ外るれば、夜にまぎれて此邸までの途中に難をさけ、門より内に入れば世は安泰なり、今しる通りの人氣のなきに、出這入るものとは犬くゞりに小犬のかげもなく、女子あるじなれば警察の眼にもかゝるまじ、ともかくもして逃がれんと思しめせと呟きぬ。

詞はなくて聞き居たりし直次郎、もはや何も仰せられますな、會得がつかしました、偽りにても此世に思ひがけざりしお詞を聞きて、残る恨みも我れは無き身、さらでも今宵は過ぐさじの決心であり

しを、御所望にて仆れんは願ふても無きこと、美事にやつて御目
にかくべし、今日までは思ひ立し事の何事も通らで、浮世に意氣
地なしの鏡なりける身なれど、一心おもひ込みたるお前様がお聲
がゝりにて、身をすて物に此度の仕事は、天晴れ直次も男なりけ
りと御心だけに賞めて賜はるが本望、其場に仆れても捕へられて
の絞木しめきの上にも思ひ残す事はござりませぬ、唯うらめしきはのが
るゝ丈のがれて來よのお詞、さりとはお情なさけとも申まじ、逃れんと
思ふ卑怯にて人一人やられん物か、我れは愚人なればその利口も
のが所爲は知らず、相手が仆るゝか我れが死ぬか二つに一つの瀬
戸際に我れ助からんの汚なき心にて後髪を引かるゝ物ありては、
いさぎよき本望は遂げられまじ、先の手に殺さるれば夫れまで、

仕遂げて後に捕へられぬ共御名は決して出すまじければ、案じ給ふな、罪は我れ一人なり、首尾よき曉に我れ命冥加ありて其場をのがるゝは萬一の事なれど、さりとして再度お顔をば見申さじ、いかなる事より罪の顯はれて、最愛いとしき君に連累の咎口惜し、何も直次は今日限りのお暇、此世に無き物とおぼしすてられて、事の成否は世の取沙汰に聞き給へ、御縁もこれまで、我れはいさぎよく死にまする、と思ひさだめては涙もこぼさねど、悄然とせしかげ障子にうつりて、長く、長く、長く、長く、お蘭有らん限り此夜の事わすれがたかるべし。

(その十二)

直次は其夜の闇にまぎれて、松川屋敷を出ぬ、明けて驚きし佐助夫婦が、常は兎角に小言もいひけれど、いかに定めて斯かる仕義と流石に胸やすからねば評議とり／＼に、おそよは朝なく手合する神々にも、心得違ひの無きやうにと祈りぬ。

ほどを隔て、冬のはじめつ方、事は番町の波崎が本宅前におこりぬ、何某の大會に幹事の任を帯びて、席上演説に喝采わくやうの中を終れば、酔ひのまぎれの車上ゆるくと半は夢を乗せて歸り來たりし表門の前、乍ち物かげより跳り出たる男の母布に手をかけて後さまにと引けば、たまらず覆へる處を取つて押へて首筋かんとひらめかす白刃やいばの、さりとは鈍かりしか頬先少しかすりて、

薄手の疵に狼藉の呼聲あたりに高く、今はこれまでとや逃足あしいづこに向ひし、たちまち露と消えて誰れとも分らず成りける、明日は新聞に見出しの文字こと／＼しく、ある黨派の壯士なるべし、何々倶楽部の誰れとやら嫌疑のかゝりて其筋に引かれぬといふもあれば、終ひに何物の業とも知れで、一月の後には風説もあとなく成りぬ、疵は猶さら半月の療治に可惜あたら男の直打も下らず、よし痕は残るとも向ひ疵とてほこられんか可笑をかし、才子の君、利口の君萬々歳の喜に、又もややりそこねて身は日蔭者の、此世に有りたりとも天地廣からぬ直次郎はいかにしたる、川に沈みしか山に隠れかくしか、もしくは心機一轉、誠の人間になりしか、夫それ怪しきは松川屋敷の末すゑなり、此事ありて三月ばかりの後、門は立派に敷

石のこはれも直りて、日毎に植木や大工の出入しげきは主あるしの替り
しなるべし、されば佐助夫婦おらんも何處に行きける、世間は廣
し、瀛車は國中に通ずる頃なれば

(をはり)

青空文庫情報

底本：（その一）～（その四） 「文學界 一九号」 文學界社雜誌
社

1894（明治27）年7月30日
（その五）～（その六） 「文學界 二一号」 文學界社雜誌
社

1894（明治27）年9月30日
（その七）～（その十二） 「文學界 二三号」 文學界社雜誌
社

1894（明治27）年11月30日

初出：（その一）～（その四） 「文學界 一九号」文學界社雜誌
社

1894（明治27）年7月30日

（その五）～（その六） 「文學界 二一号」文學界社雜誌

社

1894（明治27）年9月30日

（その七）～（その十二） 「文學界 二三号」文學界社雜誌

誌社

1894（明治27）年11月30日

※表題は底本では、「暗夜《やみよ》」となっています。

※「澤瀉」と「澤瀉」と「おもだか」、「お蘭」と「おらん」の

混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2019年4月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

暗夜 一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>